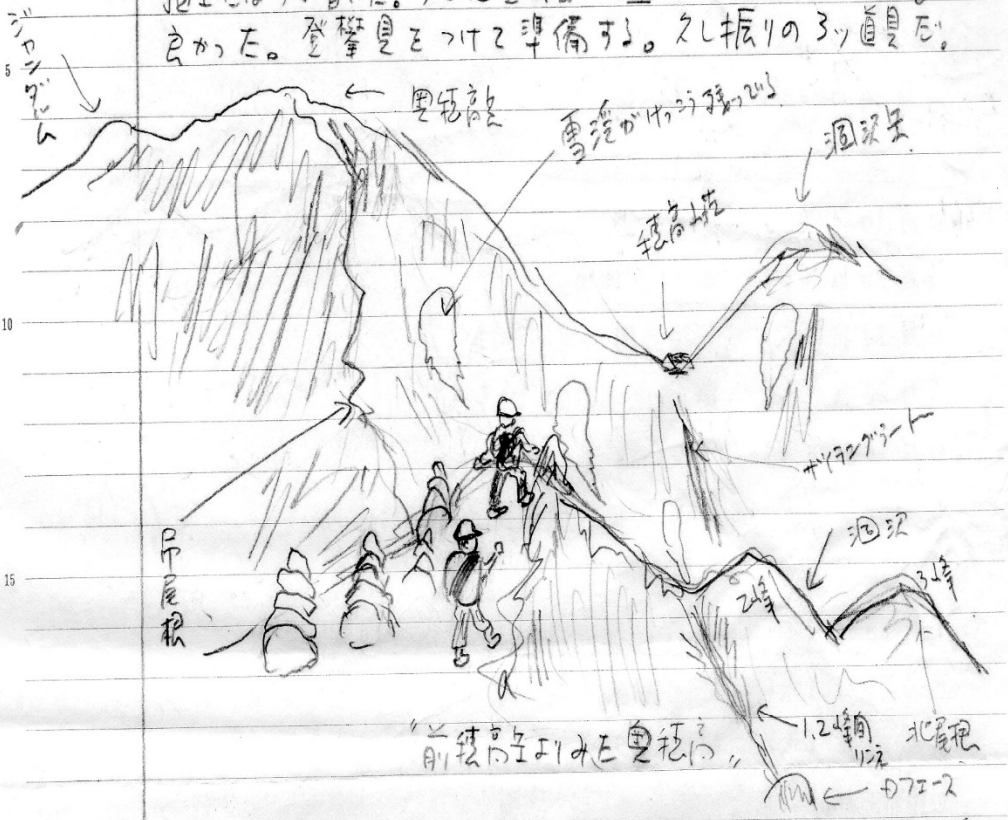
〈前穂東壁の報告〉

日時 = 8月2日
場所 = 前穂高岳東壁右岩稜古川ルート
パーティ = 毛利哲也 後藤隆徳
コースタイム = 上高地 5:20
岳沢ヒュッテ 7:30
前穂頂上 10:10
ふ4のコル
B沢出合
登攀開始 12:00
終了(頂上) 15:50
岳沢ヒュッテ 18:30

バスは伊東より参加の7名をのせて20時50分三島着。遅れている参加者を待ち21時10分出発。御殿場でこるひろって一路沢渡に向う。沢渡には2時到着。ここで仮眠とする。外は満天の星だった。
4時出発。釜トンネルのゲートの前で待機。すでにかなりのタクシー、バスが待っていた。5時ジャストゲートは開いた。上高地に向う。丁度夜明けで焼岳が霧に浮び美しかった。横江会長が"バスボーイ"で回りのガイドをする。
バスが大正池までくると今日の目的地の前穂が見えた。頂は最高で西穂、奥穂が朝日に光っていた。全員の中から"オー"という声がもれる。
すぐ上高地に着いた。東壁隊は時間がないのですぐ出発となる。"生きて帰ってこいよ"、"死なないでネー"とか皆も心配してくれた。前穂隊とかたい握手をして別れる。
そんななかウレ残念そうにこちらを向いていた中田が印象的だった。"また行こうぜ"と心の中でつぶやく。
4名は岳沢をのぼり岳沢ヒュッテに着く。全員快調だ。
小屋の前でナマリのあるアルバイトの若い娘と記念撮影をする。
1ℓ50円の水も補給する。
ヒュッテからは重太郎新道のキツイ登りがはじまる。ここも快調にこなし吊尾根分岐につく。荷物はここにデポする。
デポ地は頂上であったが、ビバークするのに富等考えると頂上では少し不適当と考え直したからである。

配布先
計

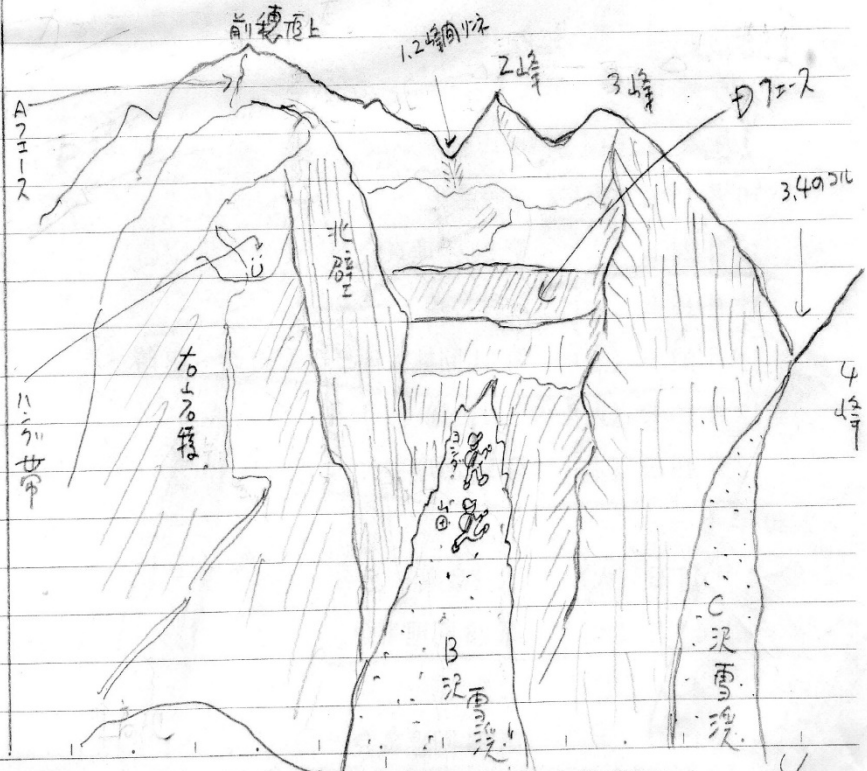
ただ今日は前穂隊が我々の水をサポートしてくれることになっていて、頂上にデポしてくれと伝えあったので少し心配だった。
岩山の渡などで一応目印はしておく。
頂上にはすぐ着いた。すでに登山者で溢れていた。天気は相変らず良かった。登攀具をつけて準備する。久し振りの3ッ道具だ。



準備が終っていよいよ北尾根の下降に入る。北尾根は登攀対象になっているところだが、そこを下降するのだから少し緊張する。
それでも1峰、2峰はほとんど問題なくノーザイルで下れた。
3峰にかかり半分程下ると3級のディーゼルに着く。
ザイルを出そうか迷ったがホールドも多そうなので強引に下る。
最後の4mは右手を下れそうだったが男女が5名登っていたので時間もないしアップザイルで下降する。
そして3,4のコルに無事着いた。4峰を越え登山者がぞくぞくとやってくる。
大学生らしい若いんが多かった。東壁の情況を聞くとAフェースに1~2人いたとのこと、すいている様なので安心した。
「上高地から来た」といった5若いんは「オニーイ!」「根性」「スゴイネー」などといっていた。彼らは3峰リッジRCCルートと北尾根にゆくとのこと。
東壁をやろうといった5「あんなコワイ所」などといっていた。

配布先	
計	

3,4のコルよりC沢を下って取付に向う。しかしC沢には雪がビッシリ残っているうえものすごい急傾斜ときているので、1ーアイゼン、1ーピッケルではとても危険で下れない。
今年は5月の時点では残雪は少なかったが、今は多い。奥穂などにもけっこう残っている。つまり6〜7月に気温が低かったのでとけ方が遅かったのであろう。
左岸の4峰寄りのガラ場を下る。そして待望のB沢出合につく。予想通り登山者は少なく東壁はゼロ、4峰の取付に男女2名のみだった。
天候は全く安定していて右手下には奥穂の池そして、そのはるか下には梓川がのんびりと蛇行していた。
昼食をとると何か少しねむくなってしまった。私はいつものうたでここで大キジを打つ。
振り返ると東壁がもうすでに午後の陽光の中に陰影をなくして黒々としていた。
壁全体がかぶっているので今にもこちらに崩れてくるのではないかという錯覚を覚えた。
私が初めて右俣に訪れたのは24才の時である。



配布先	
計	

あのとき
あれからすでにもう15年歳月が流れた。早いものである。このB沢を息をきらしながら登ったことを昨日のことの様にハッキリと覚えている。しかし当時にぎやかだったこの辺りの岩場も今日のこの静けさは一体なんだろう。
登山界(登攀界)はこの15年で大きく状況が変った。
積雪期継続登攀が終ると、直登(デイレッティシマ)主義時代に入り、その後、人工登攀への反省から既成ルートのフリー化時代に入った。アルプスの主なルートのフリー化がどんどん進んだ。
しかしその後ヨセミテ風登攀主義が幅をきかせてきた。つまりアプローチもほとんどなく簡単に取付くことの出来る困難な岩場がもてはやされる時代になった。
その結果、ホリ山、城ケ崎などはクライマーで溢れ、順番待ちをする程混み合っているが、汗水流して苦労して登る本番のアルプスの岩場はガラガラということになった。
やれチョークだ、Eb シューズだ、5.12 a だと重箱のスミをつつく様な登攀がはたして本当の山のぼりといえるだろうか。
まあしかし彼らもたぶん山のぼりをしているとは自分でも思っていないだろう、彼らは岩のぼりをやっているのである。
つまり岩のぼりをして頂に立ち山のぼりの楽しさを味わうという考えはあまりないだろう。岩のぼりは登山のひとつの手段であるという考えはない。
岩のぼりは岩のぼり、そこに山のぼりは存在しない。だから岩のぼりをやめると何も残らない。

B沢を少しのぼりカフェースを登る前、山田氏と別れる。彼らはB沢をもう少しのぼりどんづまりからカフェースをのぼる。
私達はここでザイルを結び私のトップで登攀開始。緊張一瞬である。やさしい階段状をのぼり毛利を迎える。2P目はやさしいバンドであるが見た感じでは難しそうである。
毛利氏のトップで入るが仲々手こずっている。私の記憶ではもっとやさしいハズであったのだが。
変だと思い毛利氏に待ってもらいバンドを先に行ってみるとなんとその先が正しい取付だった。
毛利氏には申し訳ないことをした。このロス時間は約30分だった。

配布先	
計	

正しい取付にゆき、毛利氏も少し疲れているので私のトップで入る。快適に40mのぼり毛利氏を迎える。次は毛利氏のトップでやはり上昇バンドを40mのぼる。これで右岩稜の旨は終えた。しかしこの辺りより高度感もグーンとでて下を見ると何かメマイを感じる。
さて核心部はいよいよここからである。
まず40mのフリーの垂壁からである。私のトップで入る。ホールド、フットホールドともマアマアあるが壁が立っていることと高度感があるのでまさに"コワイテキ"（快適のうえをいっていること）なのだ。
妻子のある身でこんな所を登るなんてムチャだ！
40mいっぱいのぼって小さなレッジに立ち毛利氏を迎える。

毛利氏も"すごい所だネ"といって登りつく。
これより毛利氏がハングに向うが、仲々のぼりにくいハングで手こずっている。
ハーケンを体打ちハングを越えるが腕がナエてしまって苦しそう。
私も長時間アブミの上でビレイをしているので足がしびれてきてしまった。
毛利氏をはげますがどうにもならない。
元々このハングはもっと大きかった。崩壊のはげしい東壁で数年前その大きなハングは落ちてしまった。だから今は昔程大きいハングではないのだが、全体的に壁がかぶっているということもありとにかく苦しい登攀を強いられている。それに毛利氏の調子も今日はいまひとつである。
とにかく毛利氏にはそこで私をビレイしてくれる様にたのみ私がのぼりだす。
登りにくい所なのでさっき毛利氏が打ったハーケンにアブミを掛けて何んの抵抗もなく乗る。
次の瞬間"スポーン"とハーケンが抜け私はもうハングの下につる下っていた。
"アッ"という間の出来ごとだった。

配布先	
計	

20年間山登りをやっているが墜落は初めての体験だった。しかも本番でおちるなんて……。幸い落ちた所がハンパだったためブランコみたいな感じでケガはどこにもなかった。
少し休み気をとり直し再びのぼりはじめる。毛利氏を越えかぶっている壁を人工で越えてゆく。3000mでの登攀のためか、疲労できた疲れか、えらく息がきれる。
アブミで強引に乗越しようやく上のバンドに出た。Aフェースにつづく岩稜まで更にのぼりビレイをする。
ここからはDフェースが良くみえ、吉田、山田氏が元気にのぼっていた。仲間をみて安心した。"ヨロレイホー"とコールを送る。
毛利氏を迎えもう1Pのぼって大テラスに着く。少しコンテニアスで歩きAフェース基部に着く。私のトップで40mのぼる。ここは岩もしっかりしていて快適だ。つづいて毛利氏がゆき待望の頂上に立つ。がたい握手。毛利氏の長年の夢もここにひとつ実現した。私もその役に立って満足していた。
頂上には2〜3人しかいなかった。陽はもう里穂の向うに傾いている。私はDフェース隊がくるまで頂上でトカゲをする。靴もぬいで開放的気分になると本当に寝てしまった。暑くもなく寒くもなく実に気持良かった。30程うトうトしてハッと我に返った時一瞬ここがどこなのか解らなかった。
17時にDフェース隊も無事頂上に着く。
たがいの健闘をたたえ合う。記念撮影をして下山。
予定ではビバークをして明日黒穂もおとそうという計画もあったが、皆くなのいる生沢に下りたい気持もつよかった。
毛利氏の強い意見もあり結局生沢に下ることにした。ただ吉田氏のヒザが少し痛いこともあり、毛利、山田氏が先行、吉田、後藤はゆっくりいくことにした。
心配した吉田氏のヒザもたいしたこともなく18:30皆くなのいる生沢に着く。
やっぱり皆くなと合流するとうれしかった。食事はもう済んでいた様だが、温いもてなしをうけた。
夜は21時ごろまで話し温いテントでゆっくり休む。
もう何の心配もなかった。全て終ったのだ。
明日は中の湯でゆっくりしたいと思った。

配布先	
計	

翌日はのんびりと起きた。天気は相変らず良かった。前穂隊には申し訳なかったが私達4名は早く下り中の湯に向う。
上高地よりタクシーで中の湯に下る。
釜トンネルの前で乗鞍隊のバスを待ち、ミカンなどをもらう。
あとはノンビリと中の湯の露天風呂につかった。

(中の湯露天風呂の図)

登山ギング

15年ぶりに挑戦 前穂高の東壁

◆前穂高岳東壁石岩稜

▽8月2日▽静岡・三島勤労者山岳会＝毛利哲也、後藤隆徳

夏山登山学校で乗鞍岳と前穂高に向かう三十八人と午前5時半別れる。岳沢ヒュッテを経由して前穂高着10時。天気は絶好の登はん日和。頂上で登はん具を着け、北尾根を下降。3、4のコル着11時。C沢は雪渓がびっしり残っているので左岸を下り、B沢出合に11時40分。ここで大休止して昼食とした。

午後、Dフェースに挑む山田、吉田両氏と別れ、取付に向かう。十五年ぶりの右岩稜のためか、取付を誤り30分ロスする。正しい取付に戻り、私がトップで登はん開始。正午、やさしいバンドを斜上し、毛利氏も続く。2ピッチ目も同じようなバンドを登り、ピナクルテラスに到着した。

3ピッチ目、いよいよ核心部の四十㍍登はんだ。高度感もぐんと増し、快適に登る。オーバーハングの下で毛利氏を迎える。ルートはここから小さなハングに向かうが、以前に比べると岩の崩壊が進み、出っぱりが小さくなっている。そのためこのルートの魅力を半減させてしまっている。十五年前のハングはもっと大きくて立派だった。

しかし、毛利氏の体調が思わしくなく、このハングで手こずった。そこで私が確保してもらい先行する。ハングの上でハーケンになげなく乗ったらスポーンと抜け、ハング下まで落ちてしまった。気をとり直してふたたび登り、ハングを抜け、ようやく上部の岩稜に出た。

途中で別かれここでDフェースに挑戦中の山田、吉田両氏を確認し、コールを送る。彼らも元気に登っていて安心した。大テラスに着き、Aフェースを2ピッチ登り、15時45分前穂頂上に着いた。Dフェース隊がくるまで一時間ほど昼寝。とても気持ちがよかった。

17時、Dフェース隊と合流して、みんなのいる岳沢ヒュッテに向かった。52歳の毛利氏もよく頑張った。

（後藤隆徳）

前穂山頂で毛利氏（左）と筆者